

特40

147

源氏讀本夕顔の巻三

大和田建樹大人校訂

源氏讀本 夕顔の巻三

東京 跡見女学校蔵版

特40
147

夕顔の巻大要

源氏の君十七歳の夏より秋までの事にて。帯木の巻と同じ年なり。帯木の巻と此巻との間に空蟬の巻ありて。空蟬の君。軒端の萩などいふ人々の物語あれど。これには省く。されは此巻にも彼人々に關する事ごもは。抜きたる多し。

此巻に出でたる人々左の如し。

源氏の君

大貳の乳母

惟光

阿闍梨

惟光の母。

源氏の君の家臣にて家令の如

き人。

惟光の兄。

顔の卷大要

源氏の君十七歳の夏より秋までの事にて。簀木の卷と同じ年なり。簀木の
 端と此卷との間に空蟬の卷ありて。空蟬の君。軒端の萩などいふ人々の
 物語ありて。これには省く。されは此卷にも彼人々に關する事どもは。
 抜きたる多し。

此卷に出でたる人々左の如し。

源氏の君

大貳の乳母

惟光

阿闍梨

惟光の母。

源氏の君の家臣にて家令の如
き人。

惟光の兄。



少將の命婦

六條の御息所

中將のたもと

夕顔の上

右近

左大臣

右大臣

惟光の妹。

桐壺帝の御兄君なる前皇太子の妃殿下なりし君。

六條の御息所の官女。

三位中將たりし人の娘。

夕顔の上の侍女。

源氏の君の御舅。

頭中將の御舅。

源氏

讀本三夕顔の卷

大和田建樹校訂

六條わたり御しのびありきところ。内よりまかんで給ふ中やどりに。夫貳のめのどのいたくわづらひて尼になりける。とぶらはんとて。五條わたりなる家たづねてはしたり。御車入るべき門はさしたりければ。人して惟光召させて。待たせ給ひけるほど。むつかしけなる大路のさまを。見渡し給へるに。この家のかたはらに。檜垣といふもの新しうして。かみは半部四五間ばかりあけ渡して。簾などもいと白う涼しけなるに。をかしき額つきの。すきかけあまた見わたのぞく。立ちさまよらん下つかた思ひやるに。あながちにたけたかき心地ぞする。いかなるものよつどへるならんと。やうかはりてればさる。

古今集

世の中はいづこかさして我ならんゆきとまるをぞ宿とさだむる

古今集旋頭歌

うちわたり遠方人に物まうすわれ其そこに白くさけるは何の花ぞも

御車もいたうやつし給へり。さきもればせ給はず。誰とか知らんと打ち解け給ひて。少しさしのぞき給へれば。門は葎のやうなるを押しあけたる。見いれの程なく物はかなきすまひを。あはれにいづこかさしてとれもほしなせば。玉の臺も同じことなり。きりかけだつもの。いと青やかなるかづらの。心地よけにはひかゝれるに。白き花ぞ。れのれひとりるみの眉ひらけたる。をちかた人に物まうすと。ひとりごち給ふを。御隨身つゝいて。かの白くさけるをなん夕顔と申し侍る。花の名は人めきて。かうあやしき垣根になん咲き侍りける。と申す。けにいと小家がちにむつかしけなるわたりの。このもかのあやしう打ちよろほひて。むねくしからぬ軒のつまごと。はひまつはれるを。くちをしの花のちぎりや。一房をりて参れとの給へは。このれしあけたる

門に入りて折る。さすがにされたる遺戸口に。黄なるすゞしの單袴。長く着なしたる童のをかしけなる。出で来て打ちまねく。白き扇のいたうこがしたるを。これに置きて参らせよ。枝もなさけなけなんめる花をとて。取らせたれば。門あけて惟光の朝臣の出で來たるして。奉らす。

かぎを置きまどはし侍りて。いとふびんなるわさなりや。物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬわたりなれど。らうがはしき大路に立ちおはしましてと。かしくまり申す。引き入れてれり給ふ。惟光が兄の阿闍梨。婿の參河の守。むすめなど渡りつどひたる程にて。かくればしましたるよろこびを。またなき事にかしこまる。尼君も起きあがりて。惜しけなき身なれど。捨て難く思ひ給へつることば。唯かく御前にさぶらひ御覽せらるゝ事の。かばり侍り

なんことを。くちをしう思う給へたゆたひしかど。思む事のしるしによみがへりてなん。かく渡りればしますを見給へ侍りぬれば。今なん阿彌陀はどけの御光も。心ぎよく待たれ侍るべき。など聞はて。よわけに泣く。

日どろれこたりがたく物せらるゝを。安からず歎きわれりつるに。かく世を離るゝさまに物し給へは。いとあはれにくちをしうなん。命ながくて。猶位たかくなども見なし給へ。さてころ九品のかみにも。さはりなく生れ給はめ。この世に少しうらみのこるは。わろきわざとなん聞くなど。涙なみてのたまふ。

かたはなるをだに。乳母などやうの思ふべき人は。あさましうまはに見なすものを。ましていとれもたゝしう。なづさひつかうまつりけん身もいたはしく。かたじけなくれもほゆべかんめれば。

古今集
よの中にさ
らぬ別のな
くもがな千
代もど斬る
人の子のた
め

すゞろに涙がちなり。子どもはいと見苦しと思ひて。背きぬる世の去り難きやうに。みづからひろみ御覽せられ給ふと。つきじろひめくはす。

君はいとあはれとれほして。いわけなかりけるほどに。思ふべき人々の打ち捨てゝものし給ひける名残。はこくむ人あまたあるやうなりしかど。親しく思ひむつおるすぢは。またなくなんれもほはし。人となりて後は限あれば。朝夕にしも見奉らず。心のまゝにどおらひまうづる事はなけれど。猶久しう對面せぬ時は。心ほろくれはゆるき。さらぬ別はなくもがなどなんなど。こまやか
に語らひ給ひて。押し拭ひ給へる御袖のにはひも。いと所せきま
でかをり満ちたるに。けに世に思へは。れしなべたらぬ人の御す
くせぞかしと。尼君をもどかしと見つる子ども。皆うちしはた

れけり。

修法など又々始むべきことなど。れきてのたまはせて。出で給ふとて。惟光にしろく召して。ありつる扇御覽すれば。もてならしたる移香。いとしみ深うなつかしうて。をかしうすさび書きたり。心あてにうれかどぞ見るしら露の。ひかりうへたる花の夕がほ。ろこはかどなく書きまぎらはしたるも。あてはかにゆるづきたれば。いと思の外にをかしうれは給ふ。

惟光に。この西なる家には何人の住むぞ。問ひ聞きたりやどのたまへは。例のうるさき御心とは思へども。さばは申さで。この五日六日こゝに侍れど。ほうさの事を思ひ給へあつかひ侍るほどに。隣の事は聞き侍らずなど。はしたなげに聞ゆれば。にくしとて思ひたれな。されどこの扇の尋ぬべきゆるありて見ゆるを。猶

このあたりの心知れらん者を召して問へ。とのたまへは。入りてこの宿守なる男を呼びて。問ひ聞く。

揚名の介なりける人の家になん侍りける。男は田舎にまかりて。女なん若く事好みて。はらからなど宮仕人にて。來通ふと申す。くはしき事は下人の知り侍らぬにやあらんと聞ゆ。さらはうの宮仕人なんなり。したり顔に物なれていへるかなど。めさましかるべきはにやあらんと思せど。さして聞わかされる心の。にくからず過しがたきぞ。例のこのかたには重からぬ御心なんめるかし。御たようがみに。いたうあらぬさまに書きかへ給ひて。

よりてころよれかども見めたるがれに。ほのく見つる花の夕顔。ありつる御隨身してつかはす。

まだ見ぬ御さまなりけれど。いとしく思ひあてられ給へる御う

ほめを。見すらすとぞし驚かしけるを。御いらへもなく程へければ。なまはしたなきに。かくわざとめかしければ。あまへて。いかに聞ゆんなどいひしろふべかんめれど。めさましと思ひて隨身は参りぬ。

御さきの松ほのかにて。いと忍びて出で給ふ。半蔀はれろしてけり。ひまどより見ゆる火の光。螢よりけにはほのかにあはれなり。御志さしの所には。木立前裁などなべての所に似ず。いとのどかに心にくく住みなし給へり。うちとけぬ御有様などの。けしき異なるに。ありつる垣根れもほし出でらるべくもあらずかし。つとめて少し寐過し給ひて。日さし出づる程々に出で給ふ。朝けの御姿は。けに人のめで聞ゆんも。ことわりなる御さまなりけり。

今日もこの蔀の前わたりし給ふ。來し方も過ぎ給ひけんわたりなれど。たゞはかなき一ふしに御心とまりて。いかなる人のすみかならんとは。ゆきよに御目とまり給ひけり。惟光日ごろありて参れり。わづらひ侍る人猶よわけに侍れは。とかく見給へあつかひてなんなど聞ゆて。近く参り寄りて聞ゆ。仰せられし後なん。隣の事知りて侍るもの呼びて。問はせ侍りしかど。はかしくも申し侍らず。いと忍びてさつきのところはひより。物し給ふ人なんあるべけれど。うの人とは。更に家の内の人にだに知らせずとなん申す。時々中垣のかいまみし侍るに。けに若き女どものすきかけ見ゆはべり。褶だつものかごどばかり引きかけて。かしづく人侍るなんめり。昨日の夕日のとりなくさし入りて侍りしに。文書くとして居て侍りし人の。顔ころいとよく侍り

しか。物思へるけばひして。ある人々も忍びてうち泣くさまなど
なん。しるく見ゆ侍ると聞ゆ。君うちるみ給ひて。知らはやとれ
もはしたり。
もし見給へうる事もや侍ると。はかなきついで作り出で。消息
など遣したりき。書き馴れたる手して。口とく返事などし侍りき。
いと口惜しうはあらぬわかうどもなん侍るめる。と聞ゆれば。猶
いひよれ。尋ね知らではさうとしかりなるとのたまふ。かの下
が下と人の思ひ捨てしすまひなれど。うの中にも思の外に口惜し
からぬを。見つけたらんと。珍しうれもほすなりけり。
秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに。思ほし亂るゝ事どもあ
りて。れはい殿には絶間置きつゝ。うらめしうのみ思ひ聞ゆ給へ
り。

六條わたりにも解け難かりし御けしきを。れもむけ聞ゆ給ひて後、
ひきかへしなのめならんはいとほしかし。されどようなりし御心
まごひのやうに。あながちなる事はなきも。いかなる事にかと見
わたり。
霧のいと深きあした。いたくろ々のかされ給ひて。ねおたけなる
けしきに。うち歎きつゝ出で給ふを。中將のれもと。御格子一間
上げて。見奉り送り給へとれほしく。御几帳引きやりたれば。み
くしもたけて見出だし給へり。前裁のいろく亂れたるを。過ぎ
がてにやすらひ給へるさま。けにたぐひなし。
廊の方へればするに。中將の君も御供に參る。紫苑色の折にあひ
たるうすもの裳。あさやかに引きゆひたる腰つき。たをやかに
なまめきたり。

見かへり給ひて。隅の間の高欄に暫し引きすゑ給へり。打ち解けたらぬもてなし。髪のがりば。めざましくも見給ふ。

咲く花にうつるてふ名はつゝめども。折らで過ぎうきけさの朝顔。いかゞすべきとて手をさらへ給へれば。いこなれてこく。

朝霧のはれまもまたぬけしきにて。花にこゝろをさめぬこそ見る。これほやけごごにぞ聞ぬなす。をかしげなる侍童の。姿このまじうごささらめきたる。指貫の裾露けに。花の中にまじりて。朝顔折りて參るほごなど。繪にかゝまほしげなり。

大方に打ち見奉る人だに。心しめ奉らぬはなし。物のなさけ知らぬ山賤も。花の陰には猶やすらはまほしきにや。この御光を見奉るあたりは。ほごくにつけて。我かなしと思ふむすめを。仕うまつらせばやと願ひ。若しは口惜しからずと思ふ妹なごもたる人

は。賤しきにても。猶この御あたりにさぶらはせんご。思ひよらぬはなかりけり。

ましてさりぬべきついでの御言の葉も。なつかしき御けしきを見奉る人の。少し物の心を思ひ知るは。いかゞはたろかに思ひ聞ぬん。明暮うち解けてしもたはせぬを。心もさなき事に思ふべかんめり。

まことやかかの惟光があづかりのかいまみは。いこよくあない見取りて申す。ろの人とは更に思ひより侍らず。人にいみじく隠れ忍ぶるけしきになん見侍るを。つれづれなるまゝに。南の半部ある長屋にわたり來つゝ。車の音すれば。若きものごものぞきなごすべかんあるに。このしうたはほしきも。はひわたる時侍るべかんめり。かたちなん。ほのかなれご。いこらうたげに侍る

一日さきたひてわたる車の侍りしをのぞきて。わらはべの急ぎ來て。右近の君こそまづ物見給へ。中將殿こそこれより渡り給ひぬれこいへば。又よろしきたこな出で來て。あなかまこ手かくものから。いかでさは知るぞ。いで見んこてはひわたる。打橋だつものを道にてなん通ひ侍る。急ぎくるものはきぬの裾を物に引きかけて。よろほひたふれて。橋よりも落ちぬべければ。いでこの葛城の神ころ。さかしょうしたきたれこむつかりて。物のぞきの心もさめぬめり。君は御直衣姿にて。御隨身ごもふありし。なにがしくれがしご數へしは。頭の中將の隨身。ろの小舎人童をなん。しるしにいひ侍りしなご聞ゆれば。たしかにろの車をぞ見ましこの給ひて。もしかのあはれに忘れざりし人にやこ。思ほしよるも。いご知らまほしげなる御けしきを見て。私の懸想もいごよくした

きて。案内も残る所なく見給へ置きながら。唯我どもご知らせて。物なごいふ若きたもこの侍るを。そらたはれしてなんはかられまかりありく。いごよく隠したりご思ひて。小さき子ごもなごの侍るが。ごごあやまちしつべきもいひまぎらはして。又人なきさまをしひてつくり侍るなご。かたりて笑ふ。

尼君のごふらひにもものせんついでに。かいまみせさせよごの給ひけり。假にても宿れるすまひのほごを思ふに。これこそ。かの人の定めあなづりし下の品ならめ。その中に思の外にをかしき事もあらば。なご思ほすなりけり。

惟光いさゝかの事も御心に違はじご思ふに。たのれも限なきまごころにて。いみじくたばかりまごひありきつゝ。忍びてたはしまさせそめてけり。この程の事くなくしければ。例のもらごつ。

女をさしてその人と尋ね出で給はねば。我も名のりをし給はで。
いとわりなうやつれ給ひつゝ。例ならずたり立ちありき給ふは。
たろかには思されぬなるべしと見れば。我馬をば奉りて。御供に
走りありく。懸想人のいと物けなき足もこを見つけられて侍らん
時。辛くもあるべきかなとごわおれど。人に知らせ給はぬまゝに。
かの夕顔のしるべせし隨身ばかり。さては顔むげにしろまじき童
一人ばかりぞ。ゐてたはしける。
もし思ひよるけしきもやきて。隣に中宿をだにし給はず。女はい
とあやしう心得ぬ心地のみして。御使に人を添へ。暁の道をうか
ゞはせ。御ありか見せん尋ぬれど。そこはかこなく惑はしつゝ。
さすがはあはれに見ではぬあるまじく。この人の御心にかゝりた
れば。ひんなく軽々しき事ごもたもほしかへしわびつゝ。いとし

はくたはします。

かゝるすぢは。まめまの亂るゝ折もあるを。いとめやすくしづめ
給ひて。人のこがめ聞ゆべきふるまひはし給はざりつるを。あや
しきまで。今朝のほど晝間のへだても覺束なくなご。思ひわづら
はれ給へば。かつはいと物ぐるほしく。さまで心ごむべき事の
さまにもあらずと。いみじく思ひさまし給ふに。人のけはひ。い
とあさましくやはらかなたほごきて。物深く重き方はれくれて。
ひたふるに若びたるものから。世をまた知らぬにもあらず。いと
やんごとなきにはあるまじ。いづくにいとかくしものとまる心ぞと。
かへすゝれはす。
いとこととらめきて。御装束をもやつれたる狩の御衣を奉り。さ
まをかへ顔をもほの見せ給はず。夜深きほどに人をしづめて出で

入りなどし給へは。昔ありけん物のへんげめきて。うたて思ひ歎
かるれど。人の御けばひはた。手さぐりにもしるきわざなりけれ
は。誰はかりにかはあらん。猶このすきものよしいでつるわざな
んめりと。太夫を疑ひながら。せめてつれなく知らず顔にて。か
けて思ひよらぬさまに。たゆまずあされありけは。いかなる事に
かと心得がたく。女がたもあやしう。やう違ひたる物れもひをな
んしける。

君もかくうらなくたゆめて。はひかくれなは。いづくをばかりと
か我も尋ねん。かりそののかくれがとはた見ゆめれは。いづかた
にもうつろひ行かん日ま。いつとも知らじとれはすに。追ひ惑は
して。なのため思ひなしつへくは。唯かはりのすさびにても過ぎ
ぬべきことを。更にさて過してんとれはされず。人めをれはして

隔て置き給ふよなくなどは。いと忍びがたく。苦しきまで思ほ
ら給へは。猶誰となくて二條の院に迎へてん。若し聞らありてび
んなかるべき事なりとも。さるべきにこそは。我心ながらいとか
く人にしむことはなきを。いかなる契にかはありけんなど。思ほ
しよる。

いさいと心やすき所にて。のどかに聞らんなど語らひ給へは。猶
あやしう。かくの給へど。世づかぬ御もてなしたれは。物恐ろし
くこそあれど。いと若びていへは。げにとほよまされ給ひて。げ
にいづれか狐ならんな。唯はかられ思へかしと。なつかしげにの
たまへは。女もいみじく靡きて。さもありぬべう給ひたり。
よになくかたばならん事なりとも。ひたふるにしたがふ心は。い
とあはれげなる人と見給ふに。猶かの頭の中將のどこなつ疑はし

く。語りし心さまよつ思ひいでられ給へど。忍ぶるやうこそはと。あながちにも問ひはて給はず。けしきはみてふと背を隠るべき心さまなどはなけれは。かれづくにどだ置かん折こそは。とやうに思ひかはることもあらぬ。心ながらも少しうつろふ事あらんとそ。あはれなるべけれどとさへれもほしけり。

八月十五夜。くまなき月かけ。ひまれはかる板屋のこりなく漏り来て。見習ひ給はぬすまひのさまもめづらしきに。曉近くなりにけるなるべし。隣の家々。あやしき賤の男の聲々。目さまして。あはれいと寒しや。今年こそなりはひにも頼む所すくなく。田舎の通ひも思ひかけねはいと心ほそけれ。北殿こそ聞き給ふやなど。言ひかはすも聞ゆ。いとあはれなるれのがじよのいとなみに。起き出でよそよめきさわぐも程なきを。女いと耻かしく思ひたり。

ゆんだちけしきはまん人は。消ゆる入りぬべきすまひのさまなன்றりかし。されどのどかに。つらきもうきもかたはらいたまことも。思ひ入れたるさまならで。我もてなしありさまは。いとあてはかにこめかしくて。またなくらうがはしき隣の用意なきを。いかなる事とも聞きしりたるさまならぬは。なか／＼恥ぢかゞやかんよりは。罪ゆるされてぞ見ゆける。

こほく／＼と鳴る神よりもれどろく／＼しく。踏み轟かすからうすの音も。枕上とればゆ。あな耳かしがましと。これにぞればさるよ。何の響とも聞き入れ給はず。いとあやしう目さましき音なひとのみ聞き給ふ。くだく／＼しき事のみ多かり。白妙の衣うつ砧の音も。かすかにこなたかなた聞きわたされ。空飛ぶ雁の聲。取り集めて忍びがたき事多かり

端近きれましどころなりければ。遣戸を引きあげ給ひて。諸共に見出だし給ふ。程なき庭にされたる吳竹。前栽の露は。猶かゝる所も同じごときらめきたり。虫の聲々みだりがはしく。壁の中のみり／＼すだに。間遠に聞きならひ給へる御耳に。さしあてたるやうに鳴き亂るゝを。なかく／＼さまかへてればさるゝも。御志一つの淺からぬに。萬の罪ゆるさるゝなんめりかし。しろきあはせ。薄色のなよ／＼かなるを重ねて。花やかならぬ姿。いとらうたげにあはかなる心地して。そこと取り立てゝすぐれたる事もなけれど。細やかになを／＼として。物うちいひたるけはひ。あな心苦しど。唯いとらうたく見ゆ。心はみたる方を少し添へたらはど。見給ひながら。なほ打ちとけて見まほしくればさるれば。いざたゞこのあたり近き所に。心安くて明かさん。かくて

のみはいと苦しかりけりとのたまへば。いかでか俄ならんど。いとれいらかにいひて居たり。この世のみならぬ契などまでたのめ給ふに。うち解くる心ばへなご。あやしくやうかはりて。世なれたる人ともればねは。人の思はん所もねはゞかり給はで。右近を召し出で。隨身を召させ給ひて。御車引き入れさせ給ふ。このある人々も。かゝる御志のれろかならぬを見知れば。れほめがしなから。頼をかけ聞ひたり。明方も近うなりにけり。鳥の聲などは聞ひて。御嶽さうじにやあらん。唯翁びたる聲にぬかづくぞ聞ゆる。立居のけはひ堪へがたげに行ふ。いとあはれに。朝の露に異ならぬ世を。何を食る身のいのりにかど。聞き給ふに。なも當來の導師とぞ拜むなる。かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけりど。あはれがり給ひ

て。

優婆塞が行ふみちをさしるべにて。來ふ世も深きちぎりたがふな。長生殿のふるきためしはゆゝしくて。はねをかばさんとは。ひまかへて。彌勒の世をぞかね給ふ。行先の御たのめいとこちたし。

よまの世のちぎり知らるゝ身のうさに。行末かねて頼みがたさよ。かやうのすぢなごも。さるは心もとなかんめり。

いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを。女は思ひやすらひ。とかくのたまふほどに。俄に雲がくれて明け行く空。いとをかし。

はしたなき程にならぬさまに。例の急ぎ出で給うて。輕らかにうちのせ給へれば。右近ぞ乗りける。

そのわたり近きなにがしの院にたはしつきて。あづかり召し出づ

るほど。荒れたる軒のしのお草しげりて見上げられたる。たどしへなくこぐらし。霧も深く露けきに。簾をさへ上げ給へれば。御袖もいたうぬれにけり。まだかやうなることを習はざりつるを。心づくしなる事にもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけん。わがまだ知らぬしのゝめの道。ならひ給へりやどのたまふ。女はぢらひて。

山の端のころもしらで行く月は。うはの空にてかけや絶やなん。心ほそくとて。物れそろしうすでけに思ひたれば。かのさしつどひたるすまひの心習ならんと。をかしうれはず。

御車入れさせて。西の對にたましなどよそふほど。勾欄に御車ひきかけて立ち給へり。右近ゆんなる心地して。きし方の事なども。人知れず思ひ出でけり。あづかりいみじくけいめいしてありけり。

しきに。この御ありさま知りばてぬ。
はのくくと物見ゆるほどに。れり給ひぬめり。假初なれど清げに
しつらひたり。

御供に人もさふらはざりけり。ふびんなるわざかなとて。むつま
しき下家司にて。殿にも仕うまつるものなりければ。参りよりて。
さるべき人めすべきにやなど申さすれど。殊更に人くまじきかく
れがもとめたるなり。更に心より外にもらすなど。口がためさせ
給ふ。

御粥など急ぎ参らせたれど。取りつら御まかなひ打ち合はず。ま
だ知らぬ事なる御旅寐に。れきなが川と契り給ふより外のことな
し。

日たくる程に起き給ひて。格子手づからあげ給ふ。いといたく荒

万葉集
鴉鳥のおき
なが川は絶
ぬぬとも君
にかたらふ
ことつさめ
やは

れて。人目もなく遙々と見渡されて。木立いと疎ましく物ふりた
り。けちかき草木などは殊に見どころなく。皆秋の野らにて。池
もみくさに埋もれたれば。いとけうとけなり。納別のかたにぞ曹
子などして。人住むべかんめれど。こなたはよなれたり。けうと
くもなりにける所かな。さりとて鬼なども。我をは見ゆるしてん
どのたまふ。

顔は猶隠し給へれど。女のいとつらしと思へれば。けにかほかり
にてへだてあらんも。事のおさま違ひたりとれはして。

夕露にひもどく花は玉はこの。たよりに見ゆしむにこそあり
けれ。露のひかりやいかほどの給へは。しりめに見れとせて。

ひかりありと見し夕顔のうは露は。たそがれ時のそらめなり
けり。とほのかにいふ。をかしたれはしなす。

げにうちとけ給へるさま世になく。所がらまいてゆゝしきまで見
給ふ。

明詠集
白波のよす
るなきさに
世をつくす
海士の子な
れば宿もさ
だめす

今古集
あまの刈る
薬に住む虫
のわかれか
らと身をこ
そなめ世
をば恨みじ

盡せずへだて給へるつらさに。あらはさじと思ひつるものを。今
だに名のりし給へ。いとむくつけしとのたまへど。海士の子なれ
ばとて。さすがにうちとけぬさま。いとあいだれたり。よしこれ
も我からなんめりと。うらみかつは語らひくらし給ふ。
惟光尋ね聞て。御くだものなど参らす。右近がいばんこと。さ
すがにいとほしければ。近くもぬさぶらひよらず。かくまでたど
りありき給ふをかしよう。さもありぬべき有様にこそはと。推し
はからるゝにも。わがいとよく思ひよりぬべかりしことを。譲り
聞て心ひろさよなど。めさましう思ひ居り。
たとしへなく静なる夕べの空をながめ給ひて。奥の方は暗う物

むつかしと女の思ひたれば。端の簾をあけて添ひ臥し給へり。夕
はゆを見かばして。女もかゝるありさまを。思の外にあやしき心
地はしながら。萬のなゆき忘れて。少し打ちとけゆくけしき。
いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮らして。物をいとれそろ
しと思ひたるさま。若う心なるし。

格子とくれろし給ひて。れほどなぶら参らせて。名残なくなり
たる御有様にて。猶心の内のへだて残し給へるなんつらきと。う
らみ給ふ。

内にいかに求めさせ給ふなんを。いづこに尋ぬらんとれほしやり
て。かつばあやししの心や。六條わたりにも。いかに思ひ亂れ給ふ
らん。うらみられんも苦しう。ことわりなりと。いとほしきすぢ
は。まづ思ひ出で聞給ふ。何心もなきさしむかひを。あはれと

れはすまゝに。あまり心深く。見る人も苦しき御有様を。少し取り捨てはやとぞ。思ひくらべられ給ひける。

宵過ぐるほどに少し寐入り給へるに。御枕上にいとをかしけなる女居て。れのがいとめでたしと見奉るをは。尋ねもおもほさでかくことなる事なき人をみてればして。時めかし給ふころ。いとめざましくつらけれとて。御かたはらの人をかき起さんとすと見給ふ。

物にれろはるゝ心地して驚き給へれば。火も消ぬにけり。うたてれはさるれば。太刀を引き抜きて。うち置き給ひて。右近を起し給ふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて参りよれり。

渡殿なるとのるひと起して。しうくとして参れといへとの給へは。いかでかまからん。くらうてといへは。あな若々しと打ち笑ひ給

ひて。手をたゞき給へは。山彦の答ふる聲。いとうとまじ。

人は聞きつけて参らぬに。この女君いみじうわなゝきまをひて。いかさまにせんと思へり。汗もしとゝになりて。われかのけしきなり。物れちをなんわりなくせさせ給ふ御はんじやうにて。いかれはさるゝにかと。右近も聞ゆ。

いとかよわくて。晝も空をのみ見つるものを。いとほしとれほして。われ人をれこさん。手たゞけは。山彦の答ふるいとうるとし。こゝにしはし近くとて。右近を引き寄せ給ひて。西の妻戸に出やゝ。戸を押しあげ給へれば。渡殿の火も消ぬにけり。

風少し打ち吹きたるに。人は少くて。さぶらふかぎり皆ねたり。この院のあづかりの子の。むつまじくつかひ給ふ若き男。又うへわらはひとり。例の隨身ばかりぞありける。

召せば御答して起きたれば。しそくさしてまゐれ。隨身も弦打して絶えずこわづくれと仰せよ。人はなれたる所に心とけていぬるものか。惟光の朝臣の來りつらんはと。問はせ給へは。さぶらひつれど。仰事もなし。曉に御迎に參るべきよし申してなんまかんで侍りぬる。ときこゆ。このかう申すものは瀧口なりければ。弓弦いとつきとしく打ち鳴らして。火危しといふく。あづかりが曹子のかたへいぬるなり。内をればしやりて。名對面は過ぎぬらん。瀧口のとのおまうし今ころと。推しはかり給ふは。まだいたう更けぬにころは。歸り入りて探り給へは。女君はさながら臥して。右近はかたばらにうつおし臥したり。こはなぞ。あなもののふるはしの物れちや。荒れたる所は。狐など

やうのものゝ人れびやかさんどて。けれそろしう思はするならん。まろあれは。さやうの物にはれどされじとて。引き起し給ふ。いごうたて。みだり心地の悪しう侍れば。うつおし臥して侍るなり。御前にこそわりなくればさるらめといへは。そよ。などかうはとて。かい探り給ふに。息もせず。引き動かし給へど。なよなよとして。我にもあらぬさまなれば。いといたくわかびたる人にて。物にけごられぬるなんめりと。せんかたなき心地し給ふ。しろうもて參れり。右近も動くべきさまにもあらねは。近き御几帳を引き寄せて。猶もてまゐれとのたまふ。例ならぬことにて。御前近くもね參らぬつゝまじさに。なけしにもねのほらす。猶もてこや。所に從ひてころとて。召し寄せて見給へば。唯この枕上に。夢に見わつるかたちしたる女。面影に見わてふと消ゆ失

せぬ。

昔物語などにこそかゝる事はきけさ。いこめづらかにむくつけゝれど。まづこの人いかになりぬるぞと。れもほす心さわぎに。身の上も知られ給はず。添ひ臥して。やゝと驚かし給へど。たゞひねにひね入りて。息はとく絶はてにけり。いはんかたなし。たのもしくいかにと。いひふれ給ふべき人もなし。法師などをころは。かゝる方のたのもしきものにはたほすべけれど。さころ心強がり給へど。若き御心地にて。いふかひなくなりぬるを見給ふに。やる方なくて。つと抱きて。あが君生き出で給へ。いみじきめな見せ給ひそとのたまへど。ひね入りたれば。けはひ物うくなり行く。右近は唯あなむつかしと思ひける心地。皆さめて。泣きまどふさまいといみじ

南殿の鬼の。なにがしのれとゞをれびやかしたるためしを。れはし出で。心づよく。さりともいたづらになりはて給はじ。夜の聲はれどろくし。あなかまこいさめ給ひて。いこあわたしきにあきれたる心地し給ふ。

この男を召して。こゝにいこあやしう。物にれそはれたる人の惱ましけなるを。只今惟光の朝臣の宿れる所にまかりて。急ぎ參るべきよしへこ仰せよ。なにがしの阿闍梨そこにもものする程ならば。こゝに來べきよし忍びていへ。かの尼君などの聞かんに。れどろくししくいふな。かゝるありきゆるさぬ人なりなど。物のたまふやうなれど。胸ふたがりて。この人を空しくしなしてんこと。いみじくれほさるゝに添へて。大方のむくくしさ。譬へんかたなし。

夜中も過ぎにけんかし。風や荒々しう吹きたるは。まして松の
ひゞき木おかく聞えて。けしきある鳥のからこゑになきたるも。
梟はこれにやとれほゆ。うち思ひめぐらすに。こなたかなたけど
ほくうとまじきに。人聲せず。などてかくはかなきやどりは取り
つるぞと。悔しさもやらんかたなし。

近は物もれほせず。君につと添ひ奉りて。わなよき死ぬべし。
又これもいかならんこ。心うらにてとらへ給へり。我ひとりさか
しき人にてれほしやる方ぞなきや。

火はほのかにまたよきて。母屋のきはに立てたる屏風のかみ。こ
ゝかことのくまよしく見ゆるに。物の足音ひしくこ踏み鳴ら
しつゝ。うしろより寄りくる心地す。惟光こく参らなんとれほす。
ありか定めぬものにて。こゝかしと尋ねけるほどに。夜の明くる

程の久しさ。千夜を過さん心地し給ふ。

辛うじて鳥の聲遙に聞ゆるに。命をかけて何の契に。かゝるめを
見るらん。我心ながら。かゝるすぢに。れほけなくあるまじき心
のむくいに。かくきし方ゆくさきのためしこなりぬべき事はある
なんめり。忍ぶとも世にある事隠れなくて。内に聞し召されんこ
とを初めて。人の思ひいばん事。よからぬわらはべの口ずさびに
なりぬべきなんめり。ありくしてをこがましき名を取るべきかな
と。れほしめぐらす。

からうじて惟光の朝臣参れり。夜中曉といはず御心にしたがへる
のよ。今宵しもさぶらはで。召しにさへ怠りつるをかくしと思は
すものから。召し入れて。のたまひ出でん事のあへなきに。ふこ
物もいはれ給はず。

右近大夫のけはひ聞くに。初よりの事。うち思ひ出でられて泣くを。君もは堪へ給はで。我ひとりさかしがり抱き持ち給へりけるに。この人に息をのべ給ひてぞ。悲しき事もれはされける。さばかりいといたく。ぬもこゝめず泣き給ふ。やうためらひて。こゝにいとあやしき事のあるを。あさましいふにも餘りてなんある。かゝるこゝみの事には。誦經などこそはすなれとて。その事どもせさせん。願なども立てさせんとて。阿闍梨ものせよと言ひやりつるは。のたまふに。昨日山へまかりのほりにけり。まづいとめづらかなる事にも侍るかな。かねて例ならず。御心地の物せさせ給ふ事や侍りつらん。さる事もなかりつとて。泣き給ふさま。いとをかしけにらうたく。見奉る人もいと悲しくて。れのれもよゝと泣きぬ。

さいへど。年うちねび。世の中のとある事もしほじみぬる人こそ。物のをりふしはたのもしかりけれ。いづれもく若きこちにて。言はん方もなけれど。この院守などに聞かせんことは。いとびんなかるべし。この人ひとりこそむつまじうもあらめ。おのづから物いひもらしつべき眷屬も立ちまじりたらん。まづこの院を出てたはしましねといふ。さてこれより人すくななる所は。いかでかあらんこのたまふ。けにさぞ侍らん。かのふるさは。女房などのかなしびに堪へず。泣き惑ひ侍らんに。隣しゆくことがむる里人多く侍らんに。おのづから聞に侍らんを。山寺こそ。猶かやうの事たのづから行きまじり。物まぎるゝこと侍らめ。思ひまはして。むかし見給へし女房の尼にて侍る。ひんがし山のへんに移し奉らん。惟光が父の朝

臣の乳母にはへこものよ。みつはふみて住み侍るなり。あたりは人しけさやうに侍れど。いさかこかに侍りこ聞ひて。明け離るゝ程のまぎれに御車寄す。

この人をらいたき給ふまじければ。うはむしろに押しくゝみて。惟光のせ奉る。いささゝやかにて。うとましげもなくらうたげなり。したゝかにしものせねは。髪はこほれ出でたるも。目くれまごひて。あさましう悲しとれほせば。なりはてんさまを見んこれほせど。はや御馬にて二條の院へたはしまさなん。人騒がしくなり侍らぬ程にとて。右近を添へてのすれば。君に馬は奉りて。我はかちより。くゝり引き上げなごして出で立つ。かつはいとあやしく覺ぬれくりなれど。御けしきのいみじきを見奉れば。身を捨てゝ行くに。君は物もれほは給はず。われかのかまにてたはし着

きたり。

人々いづこよりたはしますにか。なやましげに見ゆさせ給ふなごいへど。御帳の内に入り給ひて。胸をたさへて思ふにいといみじければ。なごて乗り添ひて行かざりつらん。生きかへりたらん時。いかなる心地せん。見捨てゝいきわかれにけりと。つらくや思はんと。心まごひの中にもたはすに。御胸せまあぐる心地し給ふ。みぐしも痛く身もあつき心地して。いと苦しくまごはれ給へば。かくばかなくて。我もいたづらになりぬるなんめりこたはす。日高くなれど起き上り給はねば。人々あやしがりて。御粥なごそゞのかし聞ゆれど。いと心細くたはさるゝに。内より御使あり。昨日も尋ね出で奉らざりしより。覺束ながらせ給ふ。たほい殿のきんだち参り給へど。頭の中將ばかりを。立ちながら

こなたに入り給へどのたまひて。御簾の内ながらのたまふ。乳母にて侍るもの。このさつきのころはひより重くおづらひ侍りしが。頭そり思む事受けなどして。そのしるしにやよみがへりたりしを。このころ又起りて弱くなんなりける。今一度とあらひ見よと申したりじかば。いときなきよりなづさひしもの。今はのきさみにつらしとや思はんと。思ひ給へてまかりしに。その家なりける下びこの病しけるが。俄にいとあへてなくなりけるを。たちはさかりて。日をくらしてなん取り出で侍りけるを。聞きつけ侍りしかば。神わざなるころは。いとふびんなる事と思ふ給へかしこまりて。は参らぬなり。この曉より。しばぶきやみにや侍らん。頭いと痛くて苦しく侍れば。いとむらゐにて聞ゆる事などのたまふ。

中將さらはさるよしをこそ奏し侍らめ。よべも御あうびにかしく求め奉らせ給ひて。御けしきあしく侍りきと。聞給ひて。立ちかへり。いかなるいきふれにかよらせ給ふぞや。のへやらせ給ふ事こそ。誠とも思ふ給へられねといふに。胸うちつふれ給ひて。かくとまかにはあらで。唯覺ぬけがらひに觸れたるよしを奏し給へ。いとこそたいしく侍れと。つれなくのたまへど。心の内には。いふかひなく悲しき事をはすに。御心地もなやましければ。人に目も見あはせ給はず。藏人の辨を召し寄せて。まめやかにかにかよるよしを奏せさせ給ふ。れはい殿などにも。かよる事ありて参らぬ御消息など。聞給ふ。

日暮れて惟光参れり。かよるけがらひありとのたまひて。参る人々も皆立ちながらまかんづれば。人しげからず。召しよせて。い

かたぞ今はと見はてつやとのたまふまゝに。袖を御顔に押しあて
ゝ泣き給ふ。

惟光もなくく。今はかぎりにはこそは物し給ふめれ。長々と籠り
侍らんもびんなきを。明日なん日よろしく侍れば。とかくの事。
いと尊き老僧のあひ知りて侍るに。言ひ語らひつけ侍りぬると聞
ゆ。添ひたりつる女はいかにどのたまへは。うれなん又はいくま
じう侍るめる。我もれくれじと惑ひ侍りて。今朝は谷にも落ち入
りぬべくなん見給へつる。かのふるさとの人に告げやらんと申せ
ど。暫し思ひしづめよ。事のさま思ひめぐらしてとなん。としら
へ置き侍りつると。語り聞ゆるまゝに。いとみじとれはして
我もいと心をやましく。いかなるべさにかとなん覺ゆるどのたま
ふ。

何か更にれもほしものせさせ給ふ。さるべきにこそ萬の事侍らぬ。
人にもゝらさじと思ひ給ふれば。惟光れりたちて。萬はものし侍
るなど申す。さかし。さみな思ひなせど。浮びたる心のすさびに。
人をいたづらになしつるかごと負ひぬべきが。いと辛きなり。少
將の命婦などにも聞かすな。尼君ましてかやうの事などいさめら
るゝを。耻かしくなん覺ゆべきと。口がため給ふ。さらぬ法師は
らなごにも。皆いひなすさま異に侍りと。聞ゆるにぞ。かゝり給
へる。

はのきく女房など。あやしく何事ならん。けがらひのよしのたま
ひて。内にも参り給はず。又かくとゝめき歎き給ふと。はのく
あやしがる。

更に事なくしなせと。そのほどの作法のたまへと。なにか。こと

くしくすへきにも侍らずとて。立つがいと悲しくればさるれば。
びんなしと思ふべけれど。今一たびかのなきからを見せらんが。
いといふせかるべきを。馬にてもものせんとたまふを。いとたい
くしき事とは思へど。されはされんはいかゞせん。はやればし
まして。夜更けぬさきに歸らせればしませと申せば。この頃の御
やつれに設け給へる狩の御装束。きかへなごして出で給ふ。
御心かきくらし。いみじく堪へ難ければ。かくあやしき道に出で立
ちても。危かりしものごりに。いかにせんとればしわづらへど。
猶悲しさのやるかたなく。只今のからを見では。又いつの世にか。
ありしかたちをも見んと。ればし念じて。例の太夫隨身を具して
出で給ふ。道遠くればゆ。
立待の月さし出で。河原のほご。みさきの火もほのかなるに。

鳥部野のかたなご見やりたるほどなご。物むつかしきも。何とも
覺は給はず。かき亂る心地し給ひて。たはしつきぬ。
あたりさへすごきに。板屋のかたばらに堂たて。へ行へる尼のすま
ひ。いとあはれなり。みあかしの影ほのかにすきて見ゆ。その屋
には女ひとり泣く聲のみして。この方に法師はらのふたりみたり
物語りしつ。わざとの聲立てぬねおつぞする。寺々の初夜も皆
行ひはて。いとしめやかなり。清水の方ぞ光多く見えて。人の
けはひもしけかりける。この尼君の子なる大徳の。聲たふとくて
經うち讀みたる。涙残りなくればさる。
入り給へれば。火取りろむけて。右近は屏風へだて。臥したり。
いかにわびしからんご見給ふ。恐ろしきけもればさる。いとらう
たげなるさまして。まだいさゝか。はりたる所なし。

手をどらへて。我に今一たび聲をだに聞かせ給へ。いかなる昔の契にかありけん。暫しの程に心を盡してあはれにたはらしを。うち捨てまどはし給ふがいみじき事と。聲をします泣き給ふ事限なし。大徳たちも誰とは知らぬに。あやしと思ひて。皆涙れとしけり。

右近をいき二條の院へとのたまへど。年ごろをさなく侍りしより。片時立ち離れ奉らず。馴れ聞ゆる人。俄に別れ奉りて。いつこにか歸り侍らん。いかになり給ひにきとか。人にもいひ侍らん。悲しき事をはさるものにて。人に言ひ騒がれ侍らんがいみじき事といひて。泣きまどひて。煙にたぐひて慕ひ参りなんといふ。ことわりなれど。さなん世の中はある。別といふものゝ悲しからぬはなし。とあるもかゝるも。同じ命の限あるものになんある。思

ひ慰めて。われをたのめとのたまひこしらへても。かくいふ我身こそは。生きとまるまじき心地すれとのたまふも。たのもしげなしゃ。

惟光。夜は明方になり侍りぬらん。はや歸らせ給はなんと聞ゆれば。願みのみせられて。胸もつとふたがりて出で給ふ。道いと露けきに。いとゞしき朝霧に。いつこともなく惑ふ心地し給ふ。ありしなから打ち臥したりつるさま。うちかはし給へりしが。我紅の御ぞの着られたりつるなど。いかなりけん契にかと。道すがらればさる。御馬にもはかどしく乗り給ふまじき御さまなれば。又惟光添ひたすけてはしまさするに。堤のほごにて馬よりすべりたりて。いみじく御心地まどひければ。かゝる道の空にてはおれぬべきにやあらん。更にいみじくまじき心地なんすると。のたま

ふに。惟光も心地まごひて。わがはかしくは。さのたまふとも。かゝる道にゐて出で奉るべきかはと思ふに。いと心あわたしければ川の水にて手を洗ひて。清水の観音を念じ奉りても。すべなく思ひまごふ。君もしひて御心を起して。心のうちに佛を念じ給ひて。又どかくたすけられ給ひてなん。二條の院へ歸り給ひける。

あやしう夜深き御ありきを。人々見苦しきわさかな。このごろ例よりも。しづ心なき御しのびありきのうちしきる中にも。昨日の御けしきのいとなやましうれはしたりしにば。いかでかくたどりありき給ふらんと。歎きあへり。

誠に臥し給ひぬるまゝに。いといたう苦しがり給ひて。二日三日になりぬるに。むげによわるやうにし給ふ。内にも聞しめし歎く

事かぎりなし。御いのりかたゞに隙なくのゝしる。祭祓修法など。言ひ盡すべくもあらず。世にたゞひなくゆゝしき御有様なれば。世に長くればしますまじきにやと。天の下の人のさわぎなり。苦しき御心地にも。かの右近を召し寄せて。局など近く給はりてさぶらはせ給ふ。惟光心地も騒ぎまごへど。思ひのどめて。この人のたづきなしと思ひたるを。もてなし助けつゝさぶらはす。君はいさゝか隙ありておほさるゝ時は。召し出でゝ使ひなどし給へば。程なく交らひつきたり。おくいど黒うして。かたちなどよからねど。かたはに見苦しからぬ若人なり。あやしう短かりける御契にひかされて。我も世にぬあるまじきなんめり。年頃のたのみ失ひて。心ほろく思ふらん慰めにも。若しなからへば。萬にはぐゝまんとこそ思ひしか。程もなく又立ちをひぬべきが。口惜しく

もあるべきかなど。しのびやかたのたまひて。よわけに泣き給へは。いふかひなき事をはれきて。いみじう惜しと思ひ聞ゆ。殿の内の人。足を空にて思ひまごふ。内より御使。雨のあしよりもしげし。思し歎きればしますを聞き給ふに。いとかたじけなくて。せめて強くははしなる。大殿もいみじくけいめし給ひて。日々にわたり給ひつゝ。さまづの事をせさせ給ふしるしにや。廿日あまりいと重くわづらひ給へれど。異なる名残のこらず。れこたりさまに見ゆ給ふ。けがらひ思み給ひしも。ひとつに満ちぬる夜なれば。覺束ながらせ給ふ御心わりなくて。内の御とのゑどころに参り給ひなごす。大殿我御車にて迎へ奉り給ひて。御物忌にやかやと。むつかしう慎ませ奉り給ふ。

我にもあらず。あらぬ世に歸りたるやうに。しはしは覺ゆ給ふ。ながづき廿日のほどにぞ。たこたりはて給ひて。いといたう面瘦せ給へれど。なか〜いみじうなまめかしうて。ながめがちに音をのみ泣き給ふ。見奉りとがむる人もありて。御もゝのけなんめりなごいふもあり。

右近を召し出で。のぞやかなる夕暮に。物語なごし給ひて。猶いとなんあやしき。なごてその人と知られじとば。隠い給へりしぞ。誠にあまの子なりとも。さはかりに思ふを知らで。隔て給ひしかはなんつらかりしと。のたまへは。なごてか深く隠し聞ゆ給ふ事は侍らん。いつのほどにてかは。何ならぬ御名のりを聞ゆ給はん。初よりあやしう覺ゆぬさまなりし御事なれば。うつゝもれはらざるあると。のたまひて。御名がくしもさばかりにこ

はど。聞ひ給ひながら。なほさりにころまざらばし給ふらめとなん。うき事に思したりしと。聞ゆれば。あいなかりける心くらべどもかな。我はしか隔つる心もなかりき。唯かやうに。人にゆるされぬふるまひをなん。まだ習はぬことなる。内に諫めのたまはするを初め。つよむ事多かる身にて。はかなく人にたはふれことをいふも。とこそせう取りなし。うるまき身の有様になんあるを。はかなかりし夕べより。あやしう心にかよりて。あながちに見奉りしも。かゝるべき契にころは物し給ひけめと。思ふもあはれになん。又うちかへしつらうれはゆる。かう長かるまじきにては。なごさしも。心にしみて。あはれとれば給ひけん。猶くはしうかたれ。今は何事をかくすべきぞ。七日くの佛かよせても。たがためとか。心の内に思はんと。のたまへは。なにかは隔て聞ひさ

せ侍らん。みづから忍び過し給ひしことを。なき御うしろに。口さがなくやと思ふ給ふるばかりになん。親たちは早う失せ給ひにき。三位の中將ごなんきこほし。いこらうたきものに思ひ聞ひ給へりしかど。我身のほどの心もとなさをればすめりしに。命ごへ堪へ給はずなりにし後。はかなきものゝたよりにて。頭の中將まだ少將にもし給ひし時。見ろめ奉らせ給ひて。三年はかりは志あるさまに通ひ給ひしを。去年の秋のところ。かの右の大いどのより。いこ恐ろしき事の聞ひまうで來しに。ものおちをわりなくし給ひし御心に。せん方なうたはしれちて。西の京に御乳母の住み侍る所になん。はひかくれ給へりし。それもいこ見苦しきに住みわび給ひて。山里にうつろひなんこれほしたりしを。去年よりはふたがりたる方に侍りければ。違ふこて。あやしき所に物し給ひ

しを。見あらばされ奉りぬる事。これほし歎くめりし。世の人に似ず物づゝしみをし給ひて。人に物思ふけしきを見ねんは。耻かきものにし給ひて。つれなくのみもてなしてこそ。御覽せられ奉り給ふめりしかこ。かたり出づるに。されほよこたほしあはせて。いよくあはれもまさりぬ。

をさなき人まどはしたりと。中將の憂へしは。さる人やこ問ひ給ふ。しか。をこししの春を物し給へりし。女にていさうたけに。なんと聞ゆ。さていづこにぞ。人にさとは知らせで。我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御かたみに。いと嬉しかるべくなんとのたまふ。かの中將にも傳ふべけれど。いふかひなきかごどれひなん。とさまかうさまにつけてはふよまんは。とがあるまじきを。うのあらん乳母なごこもことさまにいひなして。物せよかし。

など語らひ給ふ。さらばいと嬉しくなん侍るべき。かの西の京にて生ひ出で給はんは。心苦しうなん。はかしくあつかふ人なしとて。かしこになんと聞ゆ。

夕暮のしづかなるに。空のけしきいとあはれに。御前の前裁かれづくに。蟲の音も鳴きかれて。紅葉やうく色づくほど。晝にかきたるやうにたもしろきを。見渡して。心より外にをかしき交らひかなど。かの夕顔のやどりを思ひ出づるもはづかし。

竹の中に家鳩といふ鳥の。ふつゝかになくを聞き給ひて。かのありし院に。この鳥のなきしを。いと恐ろしと思ひたりしさまの。面影にらうたくおほし出でらるれば。年はいくつにかものこ給ひし。あやしう世の人に似ずあはかに見は給ひしも。かく長かるまじきなりけり。とのたまふ。十九にやなり給ひけん。右近はなく

なりにける御乳母の。すて置きて侍りければ。三位の君のらうた
がり給ひて。かの御あたり去らず。たほしたて給ひしを思う給へ
出づれば。いかでか世に侍らんとすらん。いとしも人にこ。悔し
うなん。物はかなげに物し給ひし人の御心を。たのもしき人にて。
年頃ならひ侍りける事と聞ゆ。

はかなびたるこそ女ばらうたけれ。かしこく人に靡かぬ。いと心
づきなきわざなり。みづからはかしくしくすくよかならぬ心なら
ひに。女は唯やはらかにて。とりはづしては人に欺かれぬべきが。
さすがに物づみみし。見ん人の心には従はんなん。あはれにて。
我心のまゝにとりなほして見んに。なつかしく覺ゆべき。などの
たまへは。この方の御このみには。もてはなれ給はざりけりと。
思ひ給ふるにも。口惜しく侍るわざかなとてなく。空のうち曇り

て風ひややかなるに。いといたくうちながめ給ひて。

見し人のけおりを雲とながむれば。ゆふへの空もむつまじき
かな。とひこりごち給へど。ぬこしいらへも聞えず。かやうにて
れはせましかはと思ふに。胸のみふたがりてれはゆ。耳かしがま
しかりし砧の音を思し出づるさへ。戀しくて。まさに長き夜に。
うちずんじて臥し給へり。

かの人の七なぬか。忍びて比叡の法華堂にて。こそそがす。装束
より初めてさるべきものども。こまかに誦經などせさせ給ふ。經
佛のかざりまでれるかならず。惟光が兄の阿闍梨いさなふこき人
にて。になうしけり。

御文の師にてむつまじくればす文章博士召して。願文作らせ給
ふ。その人どなくて。あはれと思ひし人の。はかなきさまになり

にたるを。阿彌陀佛にゆづり聞ゆるよし。あはれげに書き出で給へば。唯かくながら。加ふべきこと侍らさんめりと申す。忍び給へれど。御涙もこぼれていみじくればしたれば。何人ならん。その人とは聞ゆるもなく。かうたはし歎かすばかりなりけんすくせの高さよと。いひけり。

忍びて調せさせ給へりける装束の袴を。取りよせ給ひて。

なくくも今日は我ゆふ下紐を。いづれの世にかとけて見るべき。このほどまではたゞよふなるを。いづれの道に定まりて赴くらんと。れもほしやりつゝ。念誦をいとあはれにし給ふ。

頭の中將を見給ふにもあいたく胸騒ぎて。かの撫子のれひたつ有様。聞かせまほしけれど。かごとにれちて打ち出で給はず。

かの夕顔のやどりには。いづかたにと思ひまごへど。ろのまゝに

を尋ね聞はず。右近だにれとづれねは。あやしと思ひ歎きあへり。たしかならねど。けはひをさはかりにやとさゝめきしかは。惟光をかこちけれど。いとかけはなれ。けしきなくいひなして。猶同じごとすきありきければ。いこゝ夢の心地して。若し受領の子どものすきくしきが。頭の君にれち聞えて。やがてあて下りけるにやとぞ。思ひよりける。この家あるじぞ。西の京の乳母のむすめなりける。三人その子はありて。右近はこと人なりければ。思ひへたて。御有様を聞かせぬなりけりと。泣き戀ひけり。右近はたかしがましく言ひ騒がれんことを思ひて。君も今更にもらさじと忍び給へば。若君の上をだに聞かず。あさましくゆくへなくて過ぎ行く。

君は夢にだに見はやとれほし渡るに。この法事し給ひて又の夜。

ほのかにかのありし院ながら。添ひたりし女のおさまも同じやうに
て見ゆければ。荒れたりし所に住みけんもの。我に見入れけん
たよりに。かくなりぬる事ごははし出づるにも。ゆゝしくなん。

源氏讀本三終

語釋

○半部^一……ハジトミと讀む。下部は板張にして上半分を部^二にした
る窓。○部^二……格子に似て細かく作れる戸。格子の外に立てし
上に釣りあげ又は押し上げなどして日光雨雪などを覆ふやうにし
たるもの。○御隨身^三……高位高官の人の外出する時、その護衛の
ために朝廷より賜はれる武官。○忌む事^四……出家する時に師より
授かる戒の事なり。すなはち佛法の戒律をいふ。○九品のかみ^四
……極樂淨土にも九等の階級ありて。九品のかみは其上々たる
處をいふ。○褶^九……シヒラと讀む。裳の上に重ね着くる短き裳。
○ごまれひて^四……前駈なり。供人の馬にて先乗するをいふ。○
御嶽さうじ^三……吉野の御嶽すなはち金峰山に祈願を掛けて精進

潔齋するをいふ。○なも當來の導師^{三三}……なもは南無に同じく歸命の意にて神佛を拜む時の詞。當來は來世にて後生を善所にと導き給ふ神佛といふの意。○優婆塞^{三四}……ウハソクと讀む。出家せずして佛道に入りたる人をいふ。○長生殿のふるきためし^{三四}……立宗皇帝と楊貴妃との古事。○彌勒の世^{三四}……彌勒菩薩は釋迦入滅の後數へも盡されぬほど永遠の世に於て出現するといふ佛の名。千世萬世の後までもといふ程の意。○けいめい^{三五}……大切に周旋奔走する事。○下家司^{三六}……家從などの類。○御まかなひ^{三六}……御給仕役。○玉はこ^{三七}……道の枕詞なるがこゝにては道の意。○瀧口^{三三}……禁中を警護する武官。○弦打^{三三}……弓の弦を打ち鳴らして悪魔を退くる作法。○名對面^{三三}……禁中に宿直なる侍臣の名を名のる儀式。夜半にあり。○このあまうし^{三三}……これも名だいめん

事。○みつばぐみて^{四〇}……いたく年老いたるをいふ。○御あそび^{四三}……管絃の御遊。○寺々の初夜^{四七}……戌の時にする勤め。今の午後八時頃。○大徳^{四七}……行徳のすぐれたる僧。○祭祓修法^{四五}……祭は神職。祓は陰陽師。修法は僧のする祈禱。○此ほどまではただよふたるを^{六〇}……四十九日までには亡靈いづくの世界に到るとも定まらずして。途中に漂ひ居るよし佛説にいへり。

皇室顧問官兼 正三位男爵 細川潤次郎先生序
 東宮侍講 正五位 本居正豐先生序
 從五位文學博士 木村正辭先生撰

製本既成

萬葉集美夫君志

和裝帙入美製本四冊
 正價金二圓五十錢
 郵税金十六錢

皇國、古來ことたまのさきは、國といふ。宜なる哉、文物憲章の燦然たるべきものあり、就中萬葉集の如きは、實に國文の基礎、國歌の典範なり。身皇國に生れ、日夜國語を談ずるもの、奚ぞ其の本を知らずして可ならんや。然るに其の言辭、頗る古雅にして、讀者解説に困む、而して世に傳ふる所の註釋多しと雖も、或は浩漭に失し、無雜に陥り、之を學ばんと欲するもの、終に卷を閉ぢて浩歎せざるはなし、豈痛恨の事にあらざるや。加之近來の註釋の書、概して忘りに本文を改易し、次序を變更し、古書の面目を失ふこと甚し。是に於て文學博士木村正辭先生、數十年來、普く數多の異本を求め、先生珍藏の書と併せて比較考究せられ、先本文の誤脱を校訂し、次に本書用字の古音古義を開明し、遂に一部註釋を撰述し、題して萬葉集美夫君志といふ。博士は固より國文の碩學にして、殊に文字の學に精通せられ、萬葉集に於て發明する所多く、造詣頗る深きは世の普く知る所なり。從て本書が學者を利益するの大なる、亦言を待たず。依て今回我國文界の爲めに、博士の許諾を得て之を發刊し世に公にする。庶幾くは方君子、博士が多半の苦心經營と、弊店刊行の微意とを諒せられ、此の寶卷に依りて萬葉學の眞價を領得せられんことを。

發行所

東京市神田區裏神保町六番地

上原書店

明治三十四年十二月一日印刷
 明治三十四年十二月七日發行

定價金廿五錢



校訂者 東京市牛込區東横町二十番地 大和田建樹

發行者 東京市神田區裏神保町六番地 上原才一

發行所 東京市神田區裏神保町六番地 上原書店

印刷者 東京市神田區猿樂町二丁目二番地 上村龍之助

印刷所 東京市神田區猿樂町二丁目二番地 博信堂

大賣捌

東京市日本橋通三丁目 林平次郎
 東京市南區南馬場三丁目 目黒支店
 大阪市備後町四丁目 吉岡平助
 京都市東區院三條東へ入 村上勘兵衛
 名古屋市本町三丁目 川瀬代助
 仙臺市大町五丁目 藤崎祐之助
 長野市大門町 西澤喜太郎
 松本市木町二丁目 高美書店

219
107

